

初期薩摩焼における大陸陶磁器の影響について

西 田 周 平

About the influence of the continental ceramic in early Satsuma ware

NISHIDA Shuhei

At the end of the 16th century, after the War of Bunroku-Keicho (The Imjin War, 文禄・慶長の役), the production of new ceramics began in many places in Japan. Satsuma ware (薩摩焼) is one of them. Potters who was taken by Japanese Daimyo from Korean Peninsula was ordered to produce new ceramics in Japan. Therefore, it is natural to be influenced by the Korean tea bowl (高麗茶碗). But, a part of early Satsuma ware, it is remaining to be influenced by the Chinese celadon (中国青磁), or the Korean celadon (高麗青磁). This paper examines the reason why a part of early Satsuma ware was influenced by the continental ceramics, and the background of the production of them in early Satsuma ware.

Keyword: early Satsuma ware; brought ceramic; Kinkai (Hoshiyama Chuji); Hibakaride; Osumi-Shohatiman Shrine

キーワード：初期薩摩焼、請来陶磁器、金海（星山仲次）、火計手、大隅国正八幡宮

はじめに

村田珠光が提唱した「侘び茶」を武野紹鷗らが発展させたことにより、茶の湯は京・大坂・奈良の町人らが担い手となって、ますます流行した。やがて全国的に戦乱もおさまるにつれて、茶の湯の担い手は武家へと移行していき、古田織部や小堀遠州らの手によって茶の湯も武家風のものに変容していった。しかし、根本のところまで変わることはなかったのである。

戦国の乱世にあった武将らはこぞって茶の湯に取り組みようになり、「名物」と呼ばれる茶道具を蒐集するようになった。蒐集熱の高まりにしたがって、そうした名物は一国一城と比肩するほどのものとなったのである。

豊臣秀吉もまた「名物」を数多く蒐集し、茶の湯に熱心であった武将の一人である。秀吉は下層階級の出であったが、尾張の戦国大名織田信長の下で頭角を現し、ついには天下人に成り上がった、歴史上

稀に見る人物である。その天下人秀吉が最後に抱いた野望こそ、「唐入り」つまり明の征服である。日本の何倍、何十倍もある、漢・唐をも上回る広大な領土を有した明を征服せんとする、無謀としか言いようのない大望のもとにはじまった朝鮮半島への侵攻（文禄・慶長の役）は、結果さしたる戦果を得ることもなく、秀吉の病没により明へ侵攻することなく幕を閉じた。日本へ撤退する諸将の中には、朝鮮人の陶工をともなって帰国し、新たなやきもの造りに従事させた者もいた。周防・長門の毛利氏（萩焼）や肥前の鍋島氏（鍋島焼）、筑前の黒田氏（高取焼）、豊前の毛利氏あるいは細川氏（上野焼）がその代表として挙げられる。これを境に、我が国における製陶の様相は一変した。

本稿で取り上げる薩摩焼もまた、文禄・慶長の役後に薩摩・大隅・日向三ヶ国の太守であった島津氏が朝鮮人陶工を連行したことによりはじまったものである。見知らぬ地に降り立った彼らの中で、とくに島津義弘の招きを受けた金海は茶入や茶碗をはじめとする茶陶を焼いていた。そのため、茶碗に関しては高麗茶碗の影響を強く受けているのは当然のことであるといえる。

薩摩焼の中でもごく初期のものの中で、わずかに「火計手」とよばれるものが今に伝わっている。胎土、釉薬共に白色である火計手は、朝鮮半島から運んできた陶土を用いており、火のみ（燃料）が日本のものであることが、その名の由来である。火計手の大部分が白ものであるが、わずかに黒鉛釉のかかったものも伝世している。なお、火計手の中には見込みあるいは側面に刻印のある「御判手」と呼ばれるものが存在するが、御判が押されたのは茶碗のみであり、茶入にはみられないのである。この火計手の一部には、他の薩摩焼にはみられない特徴を持つものがあり、それらには初期の高麗茶碗にみられるような素朴さはなく、むしろ中国の青磁、あるいは高麗青磁などの影響を受けているのではないかと思われるようなものが伝世しているのである。そこで本稿では、初期薩摩焼の一部である火計手において大陸陶磁器のような性質がみられる理由と、そうした作品が南九州地域において誕生した背景について検討していきたい。

一 薩摩焼について

「薩摩焼」と一口に言っても、その中に含まれるものは実に多種多様である。今日薩摩焼というと、多くの人が細やかな貫入のある白地に色彩豊かな絵が緻密に描かれているものを思い浮かべることと思われるが、薩摩焼には黒色のもの（黒もん）と、白色のもの（白もん）の、大きく二つの系統が存在するのである。白ものは藩の専用窯となったので特に発達し、染付をはじめ色絵、錦手、三彩、宋胡録写しなど、色彩豊かで絢爛豪華なものであり、藩を代表する名産品となったことにより、後に薩摩焼を代表するものとなったのである。幕末の開国以降輸出先であった欧米においても「SATSUMA」は人気を博し、慶応3年（1867）のパリ万国博覧会においても高い評価を得ている。それに対して、黒ものは、その大部分が日常に用いられる雑器であり、薩摩特産の芋や米を原料とする薩摩焼酎を水と割ったものを燗する際に用いる「黒茶家」（あるいは黒千代香とも表記される）や福山町の名産である黒酢を仕込む大きな甕がその代表である。また、龍門司焼にみられる民芸調の焼物もこの流れである。このように、薩摩で産出される焼き物は他窯に比べて多岐にわたっており、同時期に興った萩焼や高取焼などと比べると大きく異なるのである。白薩摩・黒薩摩も、見た目こそ大きく違うものの、どちらも同じ薩摩にて生

まれたやきものであり、もちろんこれに当てはまらないものも存在する。その一つとして、俗に「鼈甲手」と称される、平佐において焼かれた三彩の磁器を例に挙げることができる。また、制作年代によってその作風や材質もまったく異にしており、そうしたことが受け取る側によって薩摩焼に対するイメージの違いを生じさせる一因となったのであろう。佐藤雅彦は「それほどに薩摩焼が広い範囲にわたるやきものを産した原因は、そもそも薩摩に窯業を興した朝鮮渡来の陶工たちが、同一地の出身ではなく、異なるいくつかの窯場からやってきたことに原因するらしい」¹⁾と、薩摩焼に対する人々の認識の違いについて説明しており、また関一之は窯跡から出土したトチン・ハマ・サヤなどの窯道具の出土状況と初期唐津を焼いた岸岳城周辺の窯跡における出土状況を照合することによって、異なる時期に異なる陶工集団（甕匠技術の集団と沙器匠技術の集団）が連れ来られたと推測している²⁾。

薩摩焼は、豎野系（始良市・鹿児島市）、苗代川系（いちき串木野市・日置市）、龍門司系（始良市）、元立院系（始良市）、平佐系（薩摩川内市）、熊野系（西之表市）の6つの系統の窯場から成る³⁾。これらの内、豎野系と苗代川系は古くから存在し、豎野系の源流である帖佐宇都窯と苗代川系の源流である串木野窯は、ともに古記録によってその操業開始時期を慶長年間にまでさかのぼることが可能である。開窯時期の詳細については、次章において検討することにする。

二 朝鮮人陶工の渡海時期について

朝鮮人陶工が薩摩へ渡海した時期に関しては、文禄4年（1595）説と、慶長3年（1598）説とがある。先行研究では、田沢金吾・小山富士夫『薩摩焼の研究』⁴⁾が慶長3年説を取り、これが現在においても主流である。慶長3年説の根拠の一つが国立国会図書館蔵「先年朝鮮より被召渡留帳」（以下「留帳」）⁵⁾の中にある一文である。これを以下に挙示する。

慶長三年戊戌冬被召渡候朝鮮人、串木野の内嶋平、市木の内神之川、鹿児島の内前の浜、三所に着船仕候、嶋平へ着船仕候は男女四拾三人にて御座候（中略）神之川へ着船着船仕候者其姓は申金盧三姓にて御座候、男女拾人計り有之候はんと奉存候（中略）鹿児島へ着船仕候者姓数委敷相知不申候、凡男女貳拾人余り有之候はんと奉存候

この『留帳』には慶長3年から享保7年（1722）までの苗代川窯の歴史が編年的に記されているが、明治6年（1873）のウィーン万国博覧会に薩摩焼を出品する際に、作品の選定や博覧会において作品を紹介するための参考資料として執筆されたものであり、博覧会事務局が各県庁に依頼し、県庁の命令に

1) 佐藤雅彦「薩摩」『世界陶磁全集7 江戸（二）』小学館、1980、203頁。

2) 関一之「松尾城跡採集のトチンについて」『白と黒からの脱却』関一之氏遺稿集刊行会、2019、101頁～103頁。

3) 渡辺芳郎「薩摩焼陶工は琉球にどのような製陶技術を伝えたか？」『那覇市立壺屋焼物博物館紀要 第19号』2018、34頁。

4) 田沢金吾ほか『薩摩焼の研究』国書刊行会、1987。なお、初本は東洋陶磁研究所より1941年に出版されている。

5) 前田幾千代『陶器全集18 薩摩焼総鑑』（宝雲舎、1934）に「先年朝鮮より被召渡留帳」の全文が収録されている。

よって明治5年5月25日に苗代川の役人車金圓らが史料の写しを添付し、提出したものであると深港恭子氏が指摘している⁶⁾。さらに深港氏は、「留帳」と東京大学史料編纂所所蔵の「苗代川由来記」および黎明館所蔵の「苗代川由来記」を比較検討した結果、記述されている期間に違いはあるものの、元禄15年(1702)までは記されている内容が酷似していることから、これら三史料は、根源的には一つの記録であったものと考えられる、とも指摘している。

また、時代は下るが、江戸時代中期の鹿児島藩士得能通昭(1729~89)が著した「越昭随筆」⁷⁾の中に、帖佐焼と苗代川地域に関する記述がみられる。題目である「越昭随筆」の越は本姓である越智から、昭は諱から一字ずつ取ったものである。得能氏は、もとは河野を名乗っており、伊予守護河野氏の流れを汲む一族である。「越昭随筆」巻2の内「苗代川朝鮮人伸伸李朴四家」の項には、苗代川において役人や庄屋などを勤めた四家の由来が記されているが、その中の伸家の項に「伸水石慶長三年冬申木野へ着船、六ヶ年居住す」とあり、さらに李家の項にも「李仁上慶長三年十八歳にして朝鮮国より来り」とあることから、通昭が何に拠ったのかは不明ではあるが、彼らの渡海を慶長3年のこととしている。また「苗代川朝鮮人之事」の項においても、「苗代川朝鮮人ハ慶長三年惟新公朝鮮国より御帰朝の時、朝鮮人多人数捕へられ、申木野へ召置かる、今爰を本壺屋といふ、同八年の冬苗代川へ移され(後略)」と、ここでも同様に慶長3年としている。

一方で、薩摩焼研究の先駆者前田幾千代は「留帳」の慶長3年説を否定し、渡来年月を文禄4年としている⁸⁾など、文禄4年渡来説を唱える研究者も存在した。島津義弘は文禄の役の際には大隅国栗野にあり、帰国後栗野より帖佐へ移城している。栗野一帯に窯が築かれたという古記録は存在しなかったが、工事の際に栗野松尾城跡の一面から発見された、登窯の窯詰めに用いる糸巻形トチン2点と、数10点ほどの陶磁器片について、関一之が「松尾城跡採集のトチンについて」⁹⁾に詳しくまとめている。その中で、窯と思われる遺構内部より2点のトチンが発見されたことから、帖佐において宇都窯を、加治木において御里窯を築かせたように、文禄の役の際に連行された陶工が松尾城内の一面に登窯を築いたのではないかと考察している。関氏はその傍証として、豎野関係文書中の「右高麗にて星山と申所致取持焼物細工致まかり居り候ところに、惟新様御渡海あそばされ、御帰国の砌、被召列当国ニ罷渡申候しかるところ栗野において被召出焼物細工御覧あそばされ、星山仲次と改名仰せ付けられ(後略)」¹⁰⁾という一文を挙げている。

『栗野町郷土誌』(栗野町郷土誌再版委員会編、1995)によれば、松尾城内からの出土品として、二の丸出土の大量の須恵器の食器片と少量の磁器、代官所堀出土の抹茶用石臼を挙げている。抹茶用の石臼が出土したことから、城内における喫茶の風習の存在が考えられる。同郷土誌では、二の丸出土の少量

6) 深港恭子「薩摩焼をめぐる苗代川関係文書について」『黎明館調査研究報告13』2000、103~106頁。

7) 「越昭随筆」は6巻から成り、『鹿児島県史料58 通昭録(七)』巻49~54にすべて収録されている。『通昭録』は、鹿児島県立図書館のウェブサイトにおいて公開されている。

<http://www.library.pref.kagoshima.jp/honkan/?p=25283>

8) 前田『陶器全集18 薩摩焼総鑑』、117頁。

9) 注2に同じ。

10) 豎野関係文書については、田沢ほか『薩摩焼の研究』に全文が収録されている。

の磁器は金海によって焼かれたのではないかとしているが、松尾城二の丸出土の磁器片が、関氏がとりあげた2点のトチンを用いて焼造したものであろうかが、この問題を考える上で一つの手がかりとなるのではなかろうか。

ただし、前田幾千代は先述したように文禄4年説を唱えていたが、それでも栗野における開窯については、文禄4年の帰国後の栗野滞在がわずか3ヶ月であったこと、薩摩・大隅への帰国前に秀吉に謁見した義弘が同年末の移封を察知できなかったのか、また栗野における窯業や朝鮮人陶工についての伝説がないことを理由に否定している¹¹⁾ことから、必ずしも文禄4年に朝鮮人陶工が渡来したことが、ただちに栗野における開窯には結びつかないことを念頭に考えていかなければならないように思われるのである。

三 火計手茶碗にみられる大陸陶磁器的性質

第一章にて述べたとおり、「白もの」は藩の専用窯、つまり特産品、贈答品として発達したのに対し、「黒もの」はおもに民衆用の雑器を生産していたが、その源流をたどると、ともに帖佐宇都窯、串木野窯に辿り着くのである。帖佐の宇都窯と、その後の加治木の御里窯はともに堅野系窯場の基となったものであり、串木野窯は苗代川系窯場の基となったものである。いずれも昭和9年（1934）田沢金吾、小山富士夫らによって発掘調査がなされており、その成果をまとめた『薩摩焼の研究』によれば、宇都窯も御里窯もともにごく小規模なものであり、俗に蛇窯とよばれる、朝鮮系の半円筒形の半地下式単室傾斜窯である。傾斜角度は登窯に近いものであるが、高さはすこぶる低く抑えられている。

宇都窯の操業開始時期に関しては、慶長4年（1599）の島津忠恒による伊集院忠棟（幸侃）の殺害に端を発する忠棟の子伊集院忠真による日向国庄内の都城での立て籠もり（庄内の乱）の勃発、関ヶ原の合戦における西軍側への参戦と敗走、その後の桜島における謹慎と本領安堵など、当時の義弘ら島津家を取り巻いていた状況などから推して、少なくとも慶長6、7年以降のことであろう。

宇都窯と御里窯におけるやきものの生産に大きく貢献した朝鮮人陶工金海（星山仲次）については、不明な点が多い。義弘は文禄・慶長の役において島津軍の総大将であった。一旦和議が成り朝鮮から引き揚げてきた文禄4年（1592）当時、義弘の居館は大隅国栗野にあったが、同年12月には同国帖佐へ移城している。「星山家系譜」によれば、金海は義弘の命で5年間焼物修行に赴いており、「その後、瀬戸焼茶入稽古仕るべき由、惟新公より仰せつけられ、上方え召し登り、五ヶ年まかり居り、まかり下り御用焼物相い調べ差し上げ申し候」とあることから、修行先は上方、瀬戸、あるいは美濃であったと思われる¹²⁾。とすると、慶長6、7年頃開窯した後5年間焼物修行に赴いたとなると、慶長11、12年頃帰国した計算になり、宇都における生産はごく短期間のことであったことになる。昭和9年の調査で発掘された宇都窯跡の窯壁が焼締まっておらず、焼成によって生じる自然の吹き出し釉もみられず、表面が赤黒く焦げている程度である点から、このことは裏付けられている。反対に、御里窯跡から出土した窯壁はよく焼き締まっており、自然の吹き出し釉もみられることから、御里窯における生産は長期間に及んだ

11) 前田『陶器全集18 薩摩焼総鑑』、116頁。

12) 田沢ほか『薩摩焼の研究』、131頁。

ことを実証している。したがって、金海が本格的に茶陶を制作するようになったのは加治木に移ってからであり、「当世古帖佐と唱候焼物、帖佐製に不限、多くは加治木製有之由申傳候」¹³⁾という『柁城古事集録』高崎焼物山の条にあるこの一文は、その主体が宇都窯ではなく御里窯であったことを正しく伝えているものであるといえよう。しかし、平成12年に行われた発掘調査の結果から、宇都窯はⅠ期とⅡ期に分けられることが判明し、さらにⅠ期の窯は国内に類例のない特殊な構造で、Ⅰ期の遺構は4本の排煙口と窯出しとみられる平面台形の空間が残るのみで、他はⅡ期の窯を築造の際に削られたという¹⁴⁾。つまり、修行に赴く前後の数年間、それも帰国後に打ち直したと考えるのが自然かもしれないが、同じ場所において大きく窯をつくり変えているのである。窯を改めて築造する時点ではその後に義弘が加治木に移城することは想定しておらず、加治木への移城がなければ、金海はおそらく打ち直したⅡ期の窯をもって作陶を続けていたのであろう。

宇都窯、御里窯で焼かれたと思われる物を見てみると、素焼きの陶片が多く、少量の製品は「古帖佐」と呼ばれてきた褐色ないし黒飴釉のかかったものと、胎土、釉薬ともに白色の火計手に大別される。種類は茶入、茶碗、甕と推測されるもののみとかなり限定されており、初めから茶陶を目的としている様子がうかがえる。島津義弘は初陣以来武勇の誉れ高い猛将であったが、一方で数奇風流を好む人物でもあり、こと茶道に深く傾倒し、千利休からも直接指導を受けるなどして修練に努めていた。窯跡から茶陶以外のものがあまり出土しない点から、金海の作陶はひとえに主君義弘好みの茶道具を制作するためのものであり、だからこそ宇都に留まることなく、義弘の移動に付き従って加治木にて新たに窯を築いたのである。元和5年(1619)義弘は85歳で没し、その後窯は跡を継いだ家久によって豎野に移されたが、金海もほどなくして没している。

さて、ここからは今に伝わる初期薩摩焼の中でも、特に優れていると思われるものをいくつか観ていきたい。

御里で焼かれたと考えられる蛇褐釉肩衝茶入(図1)は加治木の新納家に伝わったものである。底広がり茶入であり、どっしりとした力強さを感じさせるものである。それまでの肩衝茶入は左右対称かつ均一な曲線であるのが従来のスタイルであったが、この茶入は厳密な左右対称ではなく、鉄分の多い土を轆轤で成形しているが、不整形に轆轤挽きされている。釉は裾までかかっていないことから、腰のあたりからは土見せとなっている。全体に鉄釉を薄く化粧がけした上に黒飴釉をかけ、さらにその上から白濁釉を流しかけている。このように、三度にわたって釉薬が施されるのは珍しい。異なる種類の釉薬をかけ合わせ、また藁灰系の白い失透釉を混じえている点に関しては、上野や高取など同時期にはじまった他の窯においてもみられることから、そうした地域との交流を想定してみることも必要であろう¹⁵⁾。古格の感じられるものであり、薩摩を代表する茶入といえよう。また別の肩衝茶入(図2)は、轆轤引きの後窰で胴を削ぎ落としているが、底からおよそ四分の一にかけてはさらに削り込むことによりより細くなっている。こうした造形は織部好と伝わる高麗茶碗の御所丸茶碗や織部茶碗によくみられ

13) 田沢ほか『薩摩焼の研究』、36～37頁。

14) 帖佐宇都窯跡の内部にある立て看板(平成15年3月始良町教育委員会製作)の説明書による。

15) 佐藤「薩摩」『世界陶磁全集7 江戸(二)』206頁。

るものである。甌（首と肩の境の部分）が肩にめり込んでいるが、これは織部所持と認められる備前茶入「さび助」（図3）や織部肩衝茶入（図4）にもみられる特徴である。胴の上部には幾筋もの細い篋目がみられ、さらに正面にある一本の大きな縦の篋目をはじめ、何本もの縦の篋目がみられるなど、変化に富んだ作行である。鉄釉の上に白濁釉を斜めに流しかけ、そこに梅鉢文を二つ描き、景色としている。特に後者の茶入は織部と共通する部分が多く、明らかに古田織部の好みを意識して制作したものである。もはや黒織部の肩衝茶入と見紛うほどの作振りである。窯跡から出土した茶入陶片の中に、瀬戸系の茶入と似通った糸切底部が発掘されている¹⁶⁾ ことから、金海が瀬戸などで修業していたことは立証されているが、こうした伝世品からも修行の成果をうかがうことが可能である。古田織部は薩摩焼の茶入をとくに好んだようであり、国宝の島津家文書中に現存している、慶長17年（1612）11月22日付織部自筆の義弘宛書状において、送られてきた2つの薩摩焼茶入に対して「葉能も無御座候、葉はくろめなる葉之多御座候か能御座候、所々白キ葉之入候も能御座候」「なりハ被成御作せ候が能御座候」「尻ノすばり候ハぬ様」と形や釉葉に関して所見を述べている¹⁷⁾ ことから、薩摩焼の茶入を通して古田織部と島津氏との間には密接な交友があり、そうした中でいかにすれば中央の茶の湯界においてより受け入れられるのかと、義弘や金海らは模索していたに違いない。また、同文書には上田宗箇の薩摩逗留に関する謝辞と、宗箇が焼かせ、帰る際に持参した茶入に対する厳しい批判も記されていることから、宗箇は薩摩へ下向し、直接金海らに何らかの指導を行ったことが考えられる。

以上のように、薩摩焼の茶入は中央の茶の湯界に歓迎されたのに対し、茶碗に関してはどうもそのようではなかったようである。宇都、御里両窯からの出土陶片は茶入の量が圧倒的に多いことから、少なくとも茶碗の生産は茶入に比べるとごく限られた量であったようである。薩摩焼茶碗の中で、初期の黒もの茶碗の代表的なものとして、褐釉茶碗（図5）が挙げられる。腰部が強く張り出し、口縁に近づくにつれてすぼまっている。広く、そして高さのある高台がこの茶碗をとくに印象付けている。ここまで高さのある高台は、李朝時代の粉青沙器における祭器風の深鉢にもみられる。釉は後の堅野で焼かれたようなものとは違い、どこか古拙さを感じさせるものである。

ここまで、いわゆる黒ものの作品を中心に取り上げたが、ここからは「火計手」と称される、半磁質の細密な白土でもって造られた作品をいくつか取り上げたい。帖佐宇都窯からの出土陶片を見てみると、わずかではあるが火計手のものが存在する。同様に申木野窯も、出土陶片の大部分は黒物であるが、こちらからもわずかながら半磁質の透明釉のかかった火計手の陶片も出土しているのである。このことから、金海らのみならず、申木野に着船した伸水石や李仁上らもまた、朝鮮半島より白い陶土を持参していたことが考えられる。

宇都窯跡出土の陶片の中に、火計手の陶器片（図6）がある。胎土が白色であることから、窯跡付近で発見された白土と同様のものが使われたのであろう。これは胴部の一部と高台の一部（図7）が残っていることから、もとは茶碗であったことは明らかである。胴部の中央にはくぼみをつけており、織部茶碗、あるいは志野茶碗の作行に近い。高台は畳付の広いものであり、不整円形であったと思われる。

16) 田沢ほか『薩摩焼の研究』、22～23頁。

17) 『古田織部四〇〇年忌 大織部展』（展覧会図録）岐阜県現代陶芸美術館、2014、75頁。

この陶片から、金海らは志野、織部風の茶碗の制作にも挑んでいたことは明らかであるが、これまでに伝世品は見つかっていない。

白釉塩筥茶碗(図8)は、その形が塩を入れる壺に似ていることに由来するという。塩筥茶碗は志野の「玉川」や黄瀬戸の「難波」と同様、そうした壺を茶人が見立てて転用したうちの一つであろう。腰部に膨らみをもたせ、口元が巾着袋のように狭まった姿は、どこことなく愛らしさを感じさせるものである。釉葉はなだれ気味にかかっており、酸化焼成であったためか、全体は淡い黄緑色に焼きあがっている。

いくつか伝世している火計手茶碗の中で、もっとも声価の高いものとして、東京国立博物館蔵「白釉蓮葉文茶碗」(図9)が挙げられる。また加治木の曾木家にはこの茶碗と同手のもの(図10)が伝わっていることから、いくつかは造られたものと思われる。この他に、愛媛県松山市の某家所蔵のものを合わせた3碗が世に知られているという¹⁸⁾。写真のある東京国立博物館所蔵のものと曾木家所蔵のものとを比べてみると、全体のかたち、葉脈の付け方、高台外側の水波紋のいずれもが共通していることから、轆轤挽きしたものを型にはめて造られたのであろう。この蓮葉文茶碗については「蓮葉の意匠性、あるいは洗練された作風から、元禄ごろの作と判断するのが妥当」¹⁹⁾という見方もあるが、後年に豎野で制作された白釉捻花茶碗(図11)に比べると、文様は単純であり、全体的に動きは乏しい。また、口縁の一部が乱れてべべら状になっており、これは型での成形の際に生じたものと思われるが、いささか未熟さを感じさせるものである。また、用いた胎土が宇都窯付近で発見された純白に近い白土に似通っている。宇都窯より出土した火計手の台鉢の脚部とも酷似しており²⁰⁾、また先に取り上げた宇都窯より出土した茶碗陶片とも似通っている。こうしたことから、この茶碗は従前通り宇都、もしくは御里にて金海によって焼かれたものと考えたべきではないだろうか。

「白釉蓮葉文茶碗」は李朝白磁に通じるような、柔らか味のある白色である。型にはめて全体の姿を蓮の葉に仕立てており、これは素朴かつ作為のない、たとえば井戸茶碗や粉引茶碗のような素朴さのある高麗茶碗には見られない造形である。口縁に刻みをつけて一部を外反させることによって葉をあらわしているところは、六つの刻みによって花をあらわしている青磁茶碗「馬蝗絆」(図12)と似通った作りであるといえる。また、12世紀に作られた高麗時代の青磁のなかにも「青磁陽刻菊花文輪花形碗」(図13)という作品があるが、これは黄蜀葵の花びらを捻花状にしたものである。花と葉の違いはあるものの、全体の姿は高麗茶碗よりも、むしろこれらのほうがよく似通っているのである。

火計手の茶碗として、他にも「白釉瓜形茶碗」(図14)が挙げられる。この茶碗もおそらく先の「白釉蓮葉文茶碗」のように型でもって成形したものであろう。茶碗として相当使い込まれたものと見え、とくに口縁部には茶渋がよく浸み込んでいる。この茶碗と「白釉蓮葉文茶碗」は初期の薩摩焼茶碗の中でも、また今日に至るまでの薩摩焼の歴史の中でも異色のものであり、この作品のような具象をモチーフとした作風はこれらの作品以外は先に取り上げた白釉捻花茶碗のようなもの以外には見当たらないとい

18) 岡田喜一『陶磁大系16 薩摩』平凡社、1972、101頁。

19) 矢部良明ほか『やきもの名鑑(2) 桃山の茶陶』講談社、1999、148頁。

20) 田沢ほか『薩摩焼の研究』、24頁。

って過言ではない。高麗青磁の中にも「青磁象嵌菊蓮花文瓜形水注」（図15）という瓜形のものが存在している。高麗青磁にはこうした輪花形ものや瓜形の碗や水注などが伝世しており、作行だけに注目すると、金海の作品には中国青磁、あるいは高麗青磁にみられる特徴があらわれているといえるのである。

高麗茶碗の中でも、ある具象をモチーフとしたものが存在しないわけではない。たとえば、金海茶碗の「難波」（図16）は三方を内側に押し込むことによって全体が州浜形になっており、州浜形は和物茶碗にはみられない造形である。金海茶碗にはほかに「西王母」という銘が付けられた桃形のものも伝世している。金海茶碗は古田織部時代の日本からの注文品の一つと考えられている。これら金海茶碗は特定の形をあらわしているのに対し、「白釉蓮葉文茶碗」・「白釉瓜形茶碗」は蓮の葉・瓜といった特定のものの形をあらわしているところに大きな違いがある。

四 南九州地域における大陸陶磁器の請来

金海が朝鮮半島のどの地域にて、どのように作陶していたかは、史料から明確にうかがい知ることはできない。文禄・慶長の役の際、島津軍が進軍したルート上のうち、やきものの生産が行われていた地域のいずれかと考えるのが自然であろう。しかし、金海が朝鮮半島にて作陶していた時期には、すでに高麗青磁の技法は衰微して久しく、かろうじて「疋田筒」（図17）のような狂言袴手とよばれる、筒形、あるいは半筒形のものに象嵌技法を用いて雲鶴文などの文様をほどこしたものがごくわずかに焼かれる程度であったか、あるいはすでに途絶えていたと思われる。それでは、金海はどのようにして「白釉蓮葉文茶碗」や「白釉瓜形茶碗」のような作品を造り得たのであろうか。そのことを考えるうえで、金海らが渡海する以前の南九州地域においても、さまざまな大陸陶磁器の請来が認められることから、南九州地域における大陸陶磁器の受容の様子を検討することが、何かしらの手掛かりとなるように思われる。そこで、本章では金海の作陶の地である帖佐・加治木地域周辺における大陸陶磁器の受容の様子を見ていきたい。

大隅国一宮である正八幡宮（現在の鹿児島神宮）を代表する四社家の一つである留守家と桑幡家の屋敷跡地からは、多くの外国製の陶磁器片が出土している。ここでいう留守家とは、貞治元年（1362）に本所石清水八幡宮善法寺より執印として下向した中納言法眼坊（左衛門尉景信、あるいは紀親宗とも）を祖とする家である。紀姓留守氏は、景信以降代々正八幡宮の執印や留守職などの要職を務め、中世末期以降四社家の筆頭格となったのである。

もっとも、それ以前から留守を名乗る人物は史料上に登場しており、例えば中納言法眼坊の下向は、当時正八幡宮が抱えていた懸案に対して、景信より以前に善法寺より下向していた留守康俊による対応に起因するものであったろうし、暦応2年（1339）「11月 日」付「大隅正八幡宮講衆・殿上等訴状」を講衆・殿上等が本家（石清水八幡宮）御使越中前司入道道延に差し出したとき、拳状を出したのは留守観道であった。この留守観道と留守康俊が同一人物かどうかについては断言を避けたい。さらに、建治2年（1276）8月大隅国在庁守護代連署注進「石築地役配符案」²¹⁾から、石清水八幡宮祀官であった石清

21) 『鹿児島県史料 旧記雑録前編一』 286～292頁。

水（平山）了清の下向以前の大隅国帖佐西郷平山村の名主は留守刑部左衛門尉真用であったことを知る。さらにさかのぼって養和元年（1181）鹿児島神宮文書中「正八幡宮一命婦職補任状」の連署最奥に留守散位藤原朝臣とあり、さらに文治3年（1187）禰寝文書中「正宮神官等解」には留守散位藤原朝臣実平の署名がある²²⁾。署名から察するに、これは同一人物と考えてよいだろう。

霧島市隼人町宮内に位置する留守家館跡は、平成13年から同17年にかけて発掘調査が行われ、貿易陶磁器の遺物としては12世紀以降のものがみられる。同安窯系の青磁、竜泉窯系の青磁、白磁の玉縁口縁碗、白磁の端反口縁碗、白磁の有耳壺、青白磁、高麗青磁の陶片、景德鎮窯系の碗、漳州窯系の皿などが出土している。これら出土資料から、貞治元年（1362）に大隅国へ下向した留守景信以前に留守職にあった留守康俊、留守刑部左衛門尉真用、留守散位藤原実平らも同地に居住していた可能性が考えられるのである。

また同じ地域に位置する桑幡家館跡も平成12年から同16年にかけて発掘調査が行われた結果、多数の貿易陶磁片が出土している。桑幡氏は息長姓で、火闌降命の子孫であるという。四社家の中では最も早くから現地にあり、中世末期までは四社家の筆頭格として、代々権執印などの要職を務めていた。貿易陶磁器の遺物としては11世紀後半以降のものがみられる。白磁の玉縁口縁碗、白磁の端反口縁碗、青白磁、同安窯系の青磁、竜泉窯系の青磁や白磁、高麗青磁、天目茶碗、染付、タイ・ベトナム産の焼締陶器の陶片が出土している。請来陶磁器に限って言えば、留守家館跡から出土したものとほぼ似通っている。出土資料などから、桑幡氏は平安時代から同地に居住していた可能性が高まった。

桑幡氏館跡に隣接する弥勒院跡からは発掘調査の結果、留守氏や桑幡氏の館跡よりもさらに古い時代のものである越州窯系青磁と元時代の飛青磁が出土しており、さらに鹿児島神宮に宝物として伝世している陶磁器群の中に、14～16世紀に作られた竜泉窯青磁、景德鎮窯の法花、漳州窯の青花など7点、タイ産の焼締陶器1点の計8点があり、加えて19世紀に作られたそれらの写し8点の計16点が、平成22年に県の指定文化財に指定されている²³⁾。

始良市西餅田に位置する建昌城は中世のある特定の時期に機能していた城であるが、公園開発計画にともなって昭和63年から平成2年にかけて発掘調査が行われた。その結果、さまざまな陶磁器片が出土している。古いものでは成川式土器に縄文土器、中世の和物では備前焼の播鉢や壺甕、古瀬戸の鉄釉天目と思しきもの、土師質土器が出土している。請来陶磁器では中国の青磁、白磁の碗、瓶、皿の陶片が出土しており、ごくわずかであるが染付の陶片も2点出土している²⁴⁾。この城は、もともと帖佐郷を支配していた紀姓平山氏一族との戦いのために築かれたものである。平山氏は、京都の石清水八幡宮の別当寺である善法寺の一族であり、承久2年（1220）善法寺祐清の子（あるいは弟子）であった栄清が大隅

22) 正八幡宮社家の留守氏については、五味克夫「大隅国正八幡宮社家小考」（『続荘園制と武家社会』竹内理三博士古稀記念会、1978）に詳しい。

23) 鹿児島県霧島市の公式ウェブサイト（<http://www.city-kirishima.jp/>）において「鹿児島神宮 陶磁器」と検索すると、文化財【隼人】において紹介されている。2019年11月27日閲覧。（<https://www.city-kirishima.jp/bunka/kyoiku/rekishi/bunkazai/shitebunkazai/bunka-hayato.html> 2019年8月14日更新）

24) 建昌城跡における発掘調査の結果は、『建昌城跡』（始良町埋蔵文化財発掘調査報告書（4）始良町教育委員会、1991）にまとめられている。

国正八幡宮領「平山村」を譲与され、平山と号したことに始まる家である²⁵⁾。弘安年間に孫の了清が大隅国に下向して以来、代々帖佐の地を領した。帖佐の平山一族を降伏させ、惣領であった越後守武豊（忠親、忠国とも）、あるいは子の備後守忠正を指宿に移封させた前後に、島津忠国、あるいはその子立久は一族の季久をして帖佐を知行せしめ、瓜生野城（建昌城の初名）を築いて居住したのが、この城の始まりである。建昌城が位置する餅田一帯は、紀姓平山氏から分かれた餅田氏が知行していたところである。平山氏の移封は、『島津国史』にあるように、享徳3年（1454）ではなく、島津氏に反乱を起こした長禄3年（1459）以降のことであったと思われる。季久の次男越後守忠康（初名九郎右衛門久継）は平山城に入り、平山を号したことが御家平山氏の始まりであるが、これが後に紀姓平山氏との混同を引き起こすことになったのである。その後文明18年（1486）季久の嫡子忠廉が日州飫肥福島への移封を命ぜられた後は、この城の様子について史料からうかがい知ることができない。青磁、白磁の陶片の大部分が、その特徴からほぼ14世紀後半から15世紀にかけてのものと想定され、染付の陶片の数があまりにも少ないことから、染付が流通し始める直前の時期には、軍団の拠点として利用されることはなくなったのであろう。慶長5年（1600）関ヶ原の合戦で西軍石田方に与した島津氏は、合戦後徳川方の侵攻に備えてこの城を修築したということから、その時点では城として存在はしていたものと思われるが、薩摩焼をはじめとする近世陶磁器については発掘されなかったことから、そう遠くない時点で廃城になったのであろう。

以上のように、正八幡宮の社家の館からは、中国で焼かれた青磁をはじめ、白磁、青白磁、染付、タイ・カンボジアの南蛮陶器などの陶片が発見されており、正八幡宮には宝物として今に伝えられている。また、島津氏の持城の一つであった帖佐の建昌城からも、14世紀後半から15世紀にかけての青磁、白磁、染付などの陶片が出土している。帖佐も正八幡宮のある隼人も、ともに海に程近いところであることから、貿易によって大陸から南九州地域にもたらされていた様子がうかがえる。南北朝期までは島津氏に比肩するほどの一大勢力であった正八幡宮も、平山氏をはじめとする在地領主層の相次ぐ島津氏への帰属などにより弱体化していき、やがて中世末期には留守氏や桑幡氏もまた島津氏の支配体制下に組み込まれていったが、そうした中であっても大陸より優れた陶磁器を手に入れることが可能であったことが、発掘された陶片を通して明らかとなった。こうした品々を島津義弘によって金海は手に取って見る機会を得ることができたことは想像に難しくなく、数寄風流を好んだ義弘がそうした大陸の優れた美術品に対して興味を抱き、金海に命じて造らせたのではないだろうか。

おわりに

文禄・慶長の役を契機とする薩摩焼創始の過程を概述したうえで、帖佐、加治木地域において焼かれた、古帖佐焼と火計手を中心に取り上げた。宇都、御里と同じように朝鮮半島から陶土を持ってきてい

25) 紀姓平山氏については、五味克夫「大隅国帖佐郷小考」（『鹿児島大学法文学部紀要「文学科論集」』8、1973）、五味「大隅国正八幡宮社家小考」、三木靖「中世の始良と山城」（『始良町中世城館跡』始良町文化財調査報告書（1）、始良町教育委員会、1994）などに詳しい。

た串木野窯は藩の庇護なく成立しているところから民窯的なものであるのに対し、金海らの窯は藩の庇護を受け、特に金海は義弘の命に従って修行に赴き、その結果、志野あるいは織部に似通った茶碗や黒織部風の茶入など、織部好みのものを作陶していたことから、官窯的な性格を帯びていたのは明らかである。さらに、上田宗箇から直接指導を受けていることから、中央の茶の湯界からも歓迎されていたことに疑いはない。一方で、「白釉蓮葉文茶碗」や「瓜形茶碗」のように、粉引や井戸など、金海が朝鮮半島において作陶していた時期に焼かれていたと考えられる高麗茶碗にも、同時代の和物茶碗にもみられない、また織部好みとも思えない独特の作行のものも存在しているのである。「馬蝗絆」や高麗青磁の「青磁陽刻菊花文輪花形碗」に全体の姿が似通っていることを指摘し、作行をみると、金海の作品には中国・高麗青磁の特徴があらわれているとしたが、それではたして金海は中国青磁、高麗青磁に関する知識をどの程度有していたのであろうか、という疑問が浮かび上がってきたが、それに対する一つの解として、これまでの発掘調査による正八幡宮の社家の館、および帖佐の建昌城からの中国青磁をはじめ、白磁、青白磁、染付、タイ・カンボジアの南蛮陶器などの陶片の出土状況などから、11世紀後期以降断続的に貿易によって大陸の優品が南九州地域にもたらされていたことは疑いようがなく、数寄風流を好んだ義弘がそうした大陸の優れた美術品に対して興味を抱いたとしても、あながち不思議なことではない。金海が残したこの異例な作品たちは、風流人であった義弘の好みを反映したものであったと考えると、得心が行くのである。

本稿では金海の作陶の中心地であった帖佐・加治木地域周辺の城跡・館跡からの出土陶片から検討したが、今後島津氏の本拠地であった鹿児島にある東福寺城、清水城、内城などといった城跡からの出土品もあわせて検討することによって、より当時の様子が明らかになるのではないだろうか。また、織部好みの茶陶以外にも、藁灰系の白い失透釉など異なる種類の釉薬をかけ合わせる点や型を用いての成形など、日本国内の他の窯業地との交流をより具体的に検討する必要があると考えており、これらについては稿を改めて検討したい。

図版一覧



図1 蛇褐釉肩衝茶入



図2 肩衝茶入



図3 備前茶入「さび助」



図4 織部肩衝茶入



図5 褐釉茶碗



図6 宇都窯出土 織部茶碗風陶片



図7 同陶片 高台部分

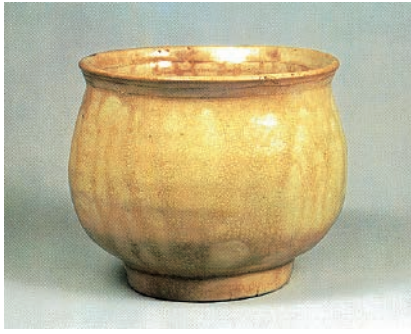


図8 塩筒形茶碗 火計手



図9 白釉蓮葉文茶碗 火計手

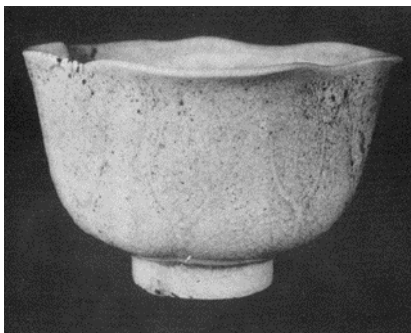


図10 白釉蓮葉文茶碗 火計手



図11 白釉捻花茶碗

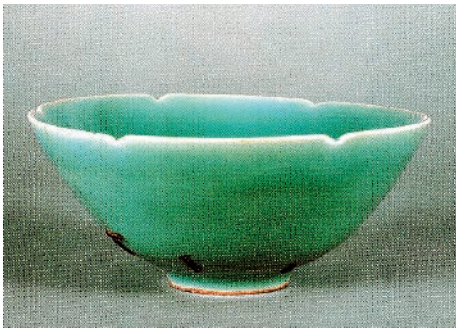


図12 青磁茶碗「馬蝗絆」



図13 青磁陽刻菊花文輪花形碗



図14 白釉瓜形茶碗 火計手



図15 青磁象嵌菊蓮花文瓜形水注

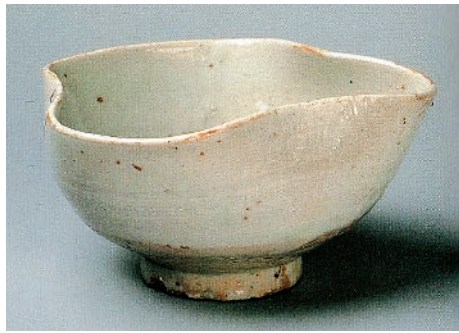


図16 金海茶碗「難波」



図17 狂言袴「疋田筒」

[図版出典]

- 図1、2：14代沈寿官『日本のやきもの1 薩摩』淡交社、1986。
図3：熊倉功夫編『名宝日本の美術16 利休・織部・遠州』小学館、1983。
図4：林屋晴三編『日本の陶磁4 織部』中央公論社、1988。
図5、9、14：林屋晴三編『世界陶磁全集7 江戸（二）』小学館、1980
図6、7：始良市デジタルミュージアム (<http://aira-digitalmuseum.jp/>) のうち「古帖佐焼宇都窯跡」のページに調査実測図などとともに掲載されている。(2019年11月29日閲覧)
<http://aira-digitalmuseum.jp/?properties-db=%e5%8f%a4%e5%b8%96%e4%bd%90%e7%84%bc%e5%ae%87%e9%83%bd%e7%aa%af%e8%b7%a1>
図8、11：林屋晴三編『日本陶磁全集19 薩摩』中央公論社、1978。
図10：田沢金吾ほか『薩摩焼の研究』国書刊行会、1987。
図12：赤沼多佳ほか『茶陶の美1 茶陶の創成』淡交社、2004。
図13、15：『高麗青磁——ヒスイのきらめき』（展覧会図録）大阪市立東洋陶磁美術館、2018。
図16、17：小田栄一『茶道具の世界2 高麗茶碗』淡交社、1999。